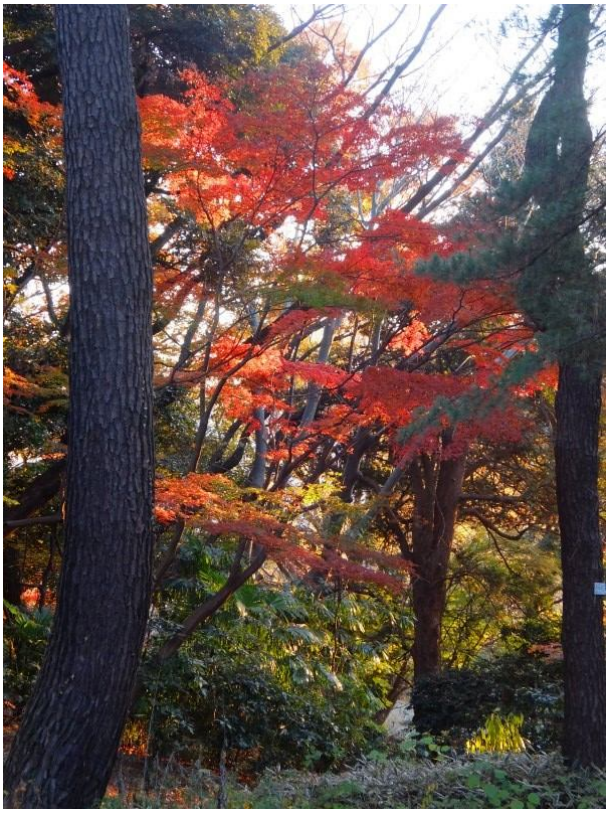
「日々の理科」（第 1260 号） 2017（H29）, 12, 18

「晩秋の小石川植物園（７）」

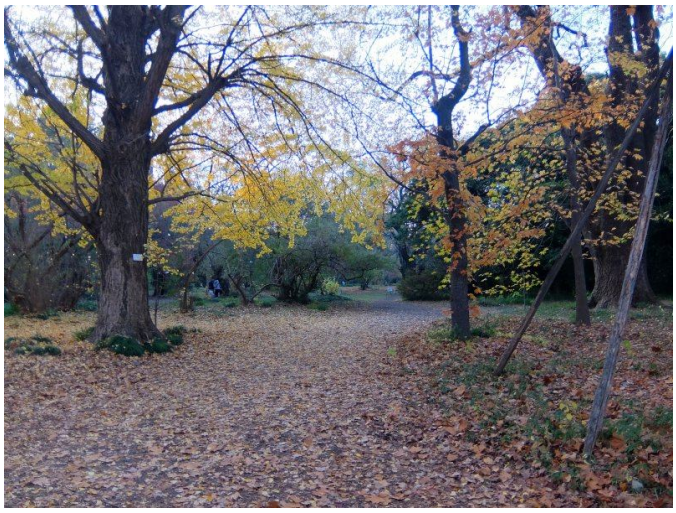
お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

午後４時前とはいえ、晩秋の日は短く、樹間に沈む夕日が見えた。森の中の空気も急に冷えてきた。私はたった２枚の絵を仕上げただけで、足早に植物園をあとにすることにした。

晩秋の夕陽は弱い。日没の太陽の位置もかなり南に寄っている。ただ、ほとんど真横から射している夕陽は、段丘崖にあるモミジの葉を美しく照らしていた。



まさしく「♪秋の夕日に　照る山もみじ」の童謡の一節である。私はしばらくこのモミジを眺めていた。



陽が当たらなくなってますます寒くなってきた。森の中も急に薄暗くなり、入園者も一人もいなくなってしまった。私は「森の中にひとりぼっち」の気分になって、ますます足早に正門に向かった。

帰り道に遠くのクスノキが見えた。樹冠にだけ夕日が当たっている。美しい。あの木に登って夕日を眺めてみたいと、変なことを思った。

薬草園の脇の道からも、段丘崖の紅葉の樹木がよく見えた。何か、少し名残惜しい気持ちになってきた。